

平安時代文学における「よもぎ」「蓬」について (二)

——平安中期の漢詩文における「蓬」を中心に——

小*
島
雪
子

要旨

十世紀半ば頃から、それまでほとんどみられなかった「よもぎ」の用例が、かな文に散見されるようになる。その理由の一つとして、その時期までに中国古典文学の「蓬」に触れ、それらに学んで日本においても「蓬」を用いて漢詩文を作ったことを挙げることができる。前稿では、中国の古典文学、日本の漢詩文、さらに、かな文へと、何が学ばれ、どのような展開をみせていくかを考えてゆくために、平安初期までの日本の漢詩文における「蓬」について検討した。本稿では、前稿で検討の対象とした時期以降、承平・天曆期から寛弘期頃までの漢詩文において「蓬」がどのように表現されているかを明らかにし、それらと中国文学との関わり、平安初期からの展開のありようについて検討する。

キーワード… 蓬、よもぎ、漢詩文、平安中期、中国文学

一

十世紀半ば頃から、それまでほとんどみられなかった「よもぎ」の用例が、和歌や日記、物語など、かな文に散見されるようになる。その主な要因は、その時期までに中国古典文学の「蓬」に触れ、それらに学んで日本においても「蓬」を用いて漢詩文が作られたことにあるものと思われる。中国文学の言葉の世界において培養された、「蓬」の多様なコノテーション、イメージや情感といったものに関心が寄せられることがなければ、かな文において「よもぎ」が、にわかに詠まれるべき、語られるべき草として、選択され対象化されることはなかったと考える。前稿では、中国の古典文学、日本の漢詩文、さらに、かな文へと、何が学ばれ、どのような展開をみせているかを

考えてゆくために、平安初期までの日本の漢詩文における「蓬」がどのように表現されているか、それらと中国文学との関わりについて検討した。^① 本稿では、前稿で検討の対象とした時期以降の漢詩文において「蓬」がどのように用いられているか、引き続きみてゆきたい。^②

二

前稿で検討の対象としたのは、菅原道真、紀長谷雄、三善清行らが活躍した頃までであった。本稿では、それ以降、承平・天曆期から寛弘期頃までについてみてゆく。日本の漢詩文の歴史的展開につ

* 宮城教育大学 教科内容学域 人文・社会科学部門（国文学）

いて述べた大江匡房の『詩境記』によれば、漢詩文が中興し再昌した時期にあたる。

はじめに、「飛蓬」「轉蓬」に関わる用例が少なからず認められるので、それらから検討する。髪の特長として用いた例が多いのだが、それらについては後に述べることにして、まず、髪の特長以外の例についてみてゆきたい。^③

① 三千里外隨行李、十九年間任轉蓬。(紀在昌「北堂漢書竟宴詠史得蘇武并序」『扶桑集』卷九)

② 運任「秋蓬風処転、栄同「朝菌露中新」。(藤原有国「除名之後、初復三品、重陽之日、得倍宴席。情感所催、欲罷不能、聊述鄙懷」呈諸知己」『本朝麗藻』卷下)

③ 輕如「蕃籬之鷄」、転似「古院之蓬」。(紀齊名「落葉賦」『本朝文粹』卷一)

④ 一葦先摧身殆没、孤蓬暗転命纔存。(源為憲「代「近陵島人」感「皇恩」詩」『本朝麗藻』卷下)

⑤ 次將槐露以承「家、蓬砂以立」操。(大江以言「冬日遊「雲林院西洞」詠「紅葉」」『本朝文粹』卷十)

「飛蓬」「轉蓬」は、前稿でも述べたように、秋に根から抜け風に吹かれて転がり飛ぶタンブルウイードについての表現であり、その詩的イメージは魏の曹植によって方向づけられ確立したとされる。風によって遠く飛ばされてゆくことから、本来あるべきところを離れ、さすらう人の比喩として多く用いられ、悲しみ、嘆き、あてどなさの情感をとめない、孤独、よるべない境遇をも含意する。「秋蓬」「孤蓬」についても、その詩的イメージはほぼ同様である。中国の古典文学に多くの用例が認められ、平安初期の日本においても、それらを踏まえた例がいくつか認められた。

紀在昌の①「三千里外隨行李、十九年間任轉蓬」は、十九年間匈奴に拘束された蘇武のありようを「轉蓬」になぞらえたもので、辺境によるべなくさすらう人の比喩として用いたものである。

藤原有国の②「運任「秋蓬風処転、栄同「朝菌露中新」」は、人のありよう、運の定めなさを「秋蓬」にたとえたものである。人の世のありようを述べていること、栄華のはかなさと対句になっていることから、特に『白氏文集』

の「昨日榮華今日衰。轉似秋蓬無定處、長於春夢幾多時」(「蕭相公宅遇自遠禪師、有感而贈」1273)を参考にしたものと思われる。当該詩の「轉似秋蓬」以下頷聯は、「千載佳句」ととられている。日本の例としては、『田氏家集』に「那教身得以秋蓬」(「無題」)をみる。^⑤

紀齊名の③「輕如「蕃籬之鷄」、転似「古院之蓬」」は、風に舞う落ち葉を、「轉蓬」を前提として「蓬」になぞらえたものである。

源為憲の④「一葦先摧身殆没、孤蓬暗転命纔存」は、家族のもとを離れ一人さすらう旅人が、風波に翻弄されるありようの比喩として「孤蓬」を用いた例である。「転」には、風にころがり飛ぶ「蓬」のイメージも重ねられたものかと思われる。「孤蓬」の例としては、鮑昭「蕪城賦」の「稜稜霜氣、載載風威。孤蓬自振、驚砂坐飛」(『文選』卷十一)、王僧達「和琅邪王依古」の「仲秋邊風起、孤蓬卷霜根」(『文選』卷三十一)があり、『白氏文集』にも、「我身何所似、似彼孤生蓬」(「我身」0566)の例をみる。鮑昭、王僧達の例は、ともに荒涼たるさまを表す景物として対象化されたものである。『白氏文集』の例は、忠州刺史時代の作にみられるもので、長安を離れさすらう我が身が「孤生蓬」に似ていると詠んでいる。④の参考にされたものと思われる。

大江以言の⑤「次將槐露以承「家、蓬砂以立」操」については、先行する「蓬砂」の用例はみられない。^⑥「蓬」が砂とともに用いられている例としては、『文選』に、先に挙げた鮑昭「蕪城賦」の「稜稜霜氣、載載風威。孤蓬自振、驚砂坐飛」(卷十二)、王僧達「和琅邪王依古」の「仲秋邊風起、孤蓬卷霜根。白日無精景、黃沙千里昏」(卷三十一)の例が、また、唐の溫庭筠の詩「山中與諸道友夜坐聞邊防不甯因示同志」に「龍砂鐵馬犯煙塵、跡近群鷗意倍親。風卷蓬根屯戊己、月移松影守庚申」、徐彥伯の詩「相和歌辭、胡無人行」に「暗磧埋砂樹、沖飆卷塞蓬」などの例をみる。また、先行する日本の例としては、嵯峨天皇「賦得隴頭秋月明」の「水咽人腸絕、蓬飛砂塞寒」(『文華秀麗集』卷下)がある。砂とともに用いられた「蓬」はいずれも「飛蓬」であり、辺境の地の荒涼としたありよう、荒蕪した故城を表現する景物の一つとして対象化されている。一方当該例は、中国、日本の先例を踏まえたものではあるが、日本では「飛蓬」「轉蓬」の現象がみられないこと、砂以外に景物であることをうかがわせる文脈がないことなどからも、景物ではなく比喩的表現

であると考えられる。「蓬砂以立」操は、遠方地域への赴任もしくは左遷、あるいは軍事などのため辺境をさすらうも、節義をもって勤めを果たした、といった解釈がとりあえずは可能ではないかと思われるが、この作品における「蓬」の意味や用い方をより明らかにするためには、誰のありようについて述べたものであるかについての検討も必要となろう。以下その点について触れてみたい。

作品の成立時期は明らかではないものの、作品に記されている内容から、大江以言が、弓削から大江に改姓後、また、治部少輔在任中の冬であることがわかる。長保五年(一〇〇三)の冬から寛弘六年(一〇〇九)冬までの成立と考えられる。その間、当該句で称賛している対象である「左親衛員外次将」、すなわち左近衛少将であった可能性のある人物は、藤原経通・藤原重尹・藤原兼経・藤原忠経・藤原頼宗・藤原定頼・源濟政の七名である。また、当該人物については、作中で「槐露以承」家「文綵煌々、漢家之雌黄失」色、筆力嶽々、唐室之雄伯差」肩」と述べられており、七名の中で条件を満たす者としては、藤原経通・藤原頼宗・藤原定頼を挙げることができる。藤原定頼は、小野宮流、藤原公任の子で、『新撰朗詠集』に摘句五首、『中右記部類紙背漢詩集』に一首、『和漢兼作集』に摘句三首が認められ、三人の中では、現存する作品が最も多い。藤原経通は、同じく小野宮流、藤原懐平の子で、『中右記部類紙背漢詩集』に二首、『別本和漢兼作集』に摘句二首が、また、藤原頼宗は、九条流、藤原道長の子で、『小野僧正請雨行法賀雨詩』に一首、『和漢兼作集』に摘句二首がみえる。他の四人については現存する作品が一例も確認されておらず、散逸した可能性は当然考えられるものの、「漢家之雌黄失」色「唐室之雄伯差」肩」などと称揚されていることから、考えにくいのではないだろうか。この四人は作品が残されていないだけでなく、作者であったことがわかる記録も管見によればみえない。

藤原経通・藤原頼宗・藤原定頼の経歴をみると、寛弘六年までの間に左遷や遠方地域への赴任は確認されない。藤原経通は近江権介、藤原頼宗は美作権介、藤原定頼は伊予権介に補任されているが、いずれも近衛少将との兼任の権介であって、実際に赴任したとは考えられず、遥授国司である。「左親衛員外次将」が三人のうちの誰かであるとすれば、「蓬砂以立」操は、左

遷や遠方地域への赴任ではなく、軍事に関わる表現とみることができよう。¹²⁾ 一方で、笹山晴生氏は、十世紀から十一世紀前半の近衛府について、国家の武力機構としての役割を喪失し、その上級官人は権門の榮譽職化を強め、その地位が特権的なものと意識されるようになったと指摘している。十一世紀前半には中将、少将の若年化が目立ち、いよいよ空虚なものになっていったともされる。¹³⁾ そうした指摘を踏まえるならば、「蓬砂以立」操は、「蓬」や砂から辺境における軍事を想起させつつも、近衛少将として実際に行ったこと、具体的な出来事を踏まえてのものとは考えられず、言わば、形式的な社交辞令とすることができよう。武官である近衛少将としての職務を、節義をもつてりつぱに果たしていることを形式的に称えた表現と考える。

大江以言の⑤「蓬砂以立」操は、中国の古典、日本の先例に学び、従来の慣用的な用い方を踏まえて「蓬」を比喩的に用いながらも、類似性、近接性双方の点において、喻えるものと喻えられるものとの間の隔たりが大きい例と言えよう。作品が宛先として想定する読者にあつては、共通の理解を得ることはそう困難なことではなかったと思われる。一方で、時と場所を共有しない読者にとっては、あいまいで意味のとりにくい、状況依存的な表現である。慣用的比喩を踏まえた上でのさらなる比喩なのであり、「蓬」を用いた表現の日本における展開のありようをみることで、例と言える。切り詰められた、意味のとりにくいこうした表現が成り立つのは、「飛蓬」転蓬の詩的イメージへの十分な理解が、漢詩文を作り読む人々の間で共有されていたからとみることもできよう。

以上、「飛蓬」転蓬に関わる用例について検討してきた。平安初期に引き続き、中国古典文学によく学んで自らの表現に取り入れていることがわかる。大江以言の⑤「蓬砂以立」操の例のように、慣用的比喩を踏まえた上でのさらなる比喩といった展開をみせ、「蓬」の詩的イメージへの十分な理解が共有されていて初めて成り立つような表現もみられた。

次節では、これまで触れなかった、髪¹⁴⁾の比喩として用いられた例についてみてゆく。

三

「飛蓬」「轉蓬」を前提として、髪^レの比喩として「蓬」を用いている例を、以下に挙げてみたい。

- ① 開「霧昔期攀」曉桂、戴「霜今歎類」秋蓬。(藤原衆海「秋夜書」懷呈諸文友兼南隣源処士」『本朝文粹』卷十二)
- ② 茜衫年旧、蓬鬢霜新。(藤原篤茂「請」被^下殊蒙「天恩」拜^中大内記紀伊輔、木工頭源方光申「他官」所并淡路国守闕^上状」『本朝文粹』卷六)
- ③ 是故紅顔自變、白首暗萌、花容先萎、蓬髮速生。(源信「横川首楞嚴院二十五三昧起請」『大日本史料』第二編之一)
- ④ 蓬鬢商山前日雪、華茵履道昔春風。(菅原雅規「暮春藤亜相山庄尚齒會詩」『尚齒會詩』)
- ⑤ 百草霑「恩心竊恃」、蕭疎兩鬢有「霜蓬」。(大江匡衡「菊蕊花未」開「江吏部集」下)
- ⑥ 晋日二毛之鏡、蓬鬢捉「霜」。(弓削以言「詳」春秋「对策」『本朝文粹』卷三)
- ⑦ 先言不「信夏侯芥、雙鬢漸梳商老蓬」。(大江以言「冬夜宿」法音寺「各言」志」『本朝麗藻』卷下)

前稿で検討した、平安初期までの髪^レの比喩としては、朝野鹿取、紀長谷雄の、悲しみに沈む女性の乱れた髪^レの比喩「髪似「飛蓬」亂復低」「滿「鬢飛蓬」、また、空海『三教指帰』の虚亡隱士の「示狂」の風貌としての「蓬亂之髪」、蛭牙公子の好色の対象である婢妾の形容としての「蓬頭」の例がみられた。既に述べたように、女性の乱れた髪^レの比喩は、『詩経』衛風、「伯兮」の「自伯之東、首如飛蓬」に依るもので、『玉台新詠』にもいくつか類似した例をみるものであり、『三教指帰』の例は、いずれも宋玉「登徒子好色賦」の「其妻蓬頭鬢耳、齷齪歷齒」(『文選』卷十九)を踏まえた表現であった。¹³

今回挙げた例は、ほぼすべてが男性の髪^レの比喩であり、老いに関わることで、多くが特に髪を焦点化していること、霜との取り合わせが認められることなどが注目される。明らかに平安初期までの例とは異なる用いられ方が認められる。類似した表現が『白氏文集』に少なからずみられるので、髪^レの比喩と

四

して「蓬」を用いている『白氏文集』の例を、以下に挙げてみたい。¹⁶

- a 短鬢經霜蓬、老面辭春木。(「因沐感髮、寄朗上人」0515)
- b 使徒花袍紅似火、其如蓬鬢白成絲。(「初著刺史緋、答友人見贈」1093)
- c 病瘦形如鶴、愁焦鬢似蓬。(「新秋病起」1315)
- d 亂蓬爲鬢布爲巾、曉踏寒山自負薪。(「代賣薪女贈諸妓」1382)
- e 兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黃。(「九日宴集。醉題群樓、兼呈周殷二判官」2200)
- f 春黛雙蛾嫩、秋蓬兩鬢侵。(「贈同座」2706)
- g 霜蓬舊鬢三分白、露菊新花一半黃。(「九月八日、酬皇甫十見贈」3382)

『白氏文集』には、管見によれば該当する例は七例認められるが、すべて乱れた髪^レの比喩である。女性の髪^レの比喩はdのみで、他はすべて白居易自らのありようについてのものである。そのうち、c以外は、すべて老いの身体^レのありようとして、髪が対象化されている。cは特に病を得ての髪^レの衰え、しおれた様を言うが、「得作白頭翁」とあり、老齡の身のそれであることには変わりない。b「蓬鬢白成絲」、e「兩邊蓬鬢一時白」、g「霜蓬舊鬢三分白」は、「蓬」になぞらえつつ、老いが深くなる過程を白髪^レの目立つ髪^レの微細な変化を捉えて対象化している。a「短鬢經霜蓬」g「霜蓬舊鬢」は、霜と取り合わせることで、霜にあたって萎れ白茶けた「蓬」のイメージから、乱れているばかりでなく、老い、衰えが表現されていると言えよう。霜との取り合わせは、日本の例では、①②⑤⑥にみられ、⑤「蕭疎兩鬢有「霜蓬」」は、「蕭疎」の語とともに用いられてもいる。老いが、髪^レの心もとなさによっても表現されている。f「春黛雙蛾嫩、秋蓬兩鬢侵」は、従来、定まらない身の上、転変の激しさ、国家の衰退などの比喩として用いられてきた「秋蓬」を、髪^レの比喩に用い、また、「春黛」の「春」と対比させることで、「秋」に自らの老い、衰えの意をもこめたものである。管見によれば、他に類例のみられない表現である。藤原衆海の①「戴」霜今歎類「秋蓬」には、髪^レの語はみえないが、特にこの例を踏まえたと言えるのではないか。「秋蓬」は、先に述べたように日本の例として、既に『田氏家集』に「那教身得似秋蓬」をみるが、衆海の①とは用い方が異なるように思われる。まだ若く心に期する

ところのあつた昔に對し、老いた今の我が身のありようを述べたもので、「秋蓬」は、『白氏文集』の「秋蓬兩鬢侵」を踏まえて、衰え老いた鬢の比喩として用いたものと考えられよう。¹⁸あるいは、先にも触れた『白氏文集』の「轉似秋蓬無定處」(273)や『田氏家集』にも学んで、あてどなく、定まらない身の意をもこめたものか。

老いた人の鬢の比喩、霜との取り合わせは、『白氏文集』以前にも『芸文類聚』、唐詩などに散見されるが、『白氏文集』には、別して多くの用例が認められ、述べたように新たな表現の試みもなされていて、白居易が好んで用いた比喩と言うことができよう。『白氏文集』がさかんに読まれ、愛好されていたことから、「蓬」を用いた平安中期の鬢の比喩は、『白氏文集』に触発されたものと考えてよいものと思われる。

なお、菅原雅規の④「蓬鬢商山前日雪」、大江以言の⑦「雙鬢漸梳商老蓬」は、ともに『史記』にみられ『初学記』にも採られている商山の四皓の故事に基づき、鬢の白さをいう。¹⁹故事では「鬢眉皓白」とあるのを、鬢にずらすのは「蓬」の比喩を重ねたためでもあろう。⑦は④をも参考にしたものと思われる。

以上、「飛蓬」「轉蓬」を前提として、髪²⁰の比喩として「蓬」を用いている例について検討した。男性の老いに関わって鬢を焦点化していること、霜との取り合わせがみられることなど、前稿で検討した平安初期までとは異なる用いられ方が認められた。髪²⁰の比喩として「蓬」を用いたそうした例は、『白氏文集』に学んだものと考えられる。

次節では、同様に、いくつかのまとまった例が認められる、住まいに関わって用いられたものについてみてゆきたい。

四

住まいに関わる「蓬」は、家が粗末であること、貧しさ、荒廃を表す。『莊子』を始めとして『礼記』その他の例にみられるように、高潔、高德、清貧、悠々自適といったプラスの価値を帯びて用いられるが、一方で、自己卑下や、謙遜の言葉として用いられたり、不遇感、嘆き、自嘲、第三者からの同情や、

惜しむ気持ち²¹がこめられる場合も多い。平安初期までの日本の例は、前稿で検討したように、いずれも中国古典に学んだものであった。以下、それに続く平安中期の例を挙げてみてゆく。

①單貧久被蓬門閉、示誠多教竹簡編。(源順「五歎吟并序」『扶桑集』卷七)

②順暮年折桂、寒夜臥蓬。(源順「初冬於栖霞寺」同賦「霜葉滿林紅」²²李部大王教」『本朝文粹』卷十)

③樞袍藍袖、懽々于市朝。蕙帳蓬扉、欣々于巖谷。(延昌「延曆寺奉賀儲君始立」啓」『朝野群載』卷一)

④性是頑魯、雖甘貧於衡門之蓬、節非夷齊、難忍餓於首陽之薇。(藤原篤茂「請被殊蒙」天恩「拜大内記紀伊輔、木工頭源方光申」他官「所并淡路国守闕」狀」『本朝文粹』卷六)

⑤無愁秋草對顏巷、不厭零蓬閉意樞。(慶滋保胤「平安韻字集」虞模韻・雜物)

⑥吾等既非枏房桂宮之子、或提蓬門葦戶之親。(源信「横川首楞嚴院二十五三昧起請」『大日本史料』第二編之一)

⑦我等深厭此蓬園瓦礫之境、遙望彼蓮利瑠璃之城。(源信「横川首楞嚴院二十五三昧起請」『大日本史料』第二編之一)

⑧聽松風之曲一夜、暫慰蓬衡。(大江匡衡「仲春庚申夜陪貝外藤納言文亭」同賦「夜座聽松風」一首并序」『江吏部集』上)

⑨幸侍歡筵、榮耀足、恐歸蓬華、戀蓬萊。(大江匡衡「九日侍宴同賦」菊是爲「仙草」應製一首」『江吏部集』下)

⑩草澤皆開堆玉帛、蓬衡緣底歡餘生。(大江匡衡「重陽侍宴清涼殿」同賦「菊是花聖賢」應製詩一首」『江吏部集』下)

⑪家舊門閑只長蓬、時无謁客事條空。(藤原為時「門閑無謁客」『本朝麗藻』卷下)

⑫蓬居雖耽仙郎到、愁命詩篇惜晚輝。(藤原公任「白河山家眺望詩」『本朝麗藻』卷下)

⑬華舩有月波澄色、蓬戸無人雨滴聲。(藤原公任「閑中間左親衛員外將軍兩度遊宇治河、聊述中懷、偷呈下風」『本朝麗藻』卷下)

平安初期と同様に、貧しく粗末な住まい、あるいは門を意味する比喩的表現が多くみられる。①⑥の「蓬門」、②「臥蓬」、③「蓬扉」、⑨「蓬華」、⑫「蓬居」、⑬「蓬戸」がそれにあたる。自らの家、門をいう①②⑥⑨⑫⑬は、いずれも自己卑下や謙遜の言葉として用いられており、特に①には、不遇感や嘆きを読みとることができる。

源順の①「單貧久被蓬門閉」、源信の⑥「蓬門草戸之親」の「蓬門」の例は、日本の例としても、既に『三教指帰』に「魏侯之輅、軾於蓬門」(卷上)、『菅家文章』に「露落蓬門路九泉」(雲州茂司馬、視詩草數首。吟詠之次、適見_下哭_下蒼侍暨_上之長句。不_レ勝_二復悼_一、聊敘_二一篇_一)、「暁出蓬門去」(晚秋二十詠 樵夫)がみられ、中国古典には、『芸文類聚』『白氏文集』、杜甫などの唐詩その他に散見される。²⁰⁾

大江匡衡の⑨「恐歸_二蓬華_一戀_二蓬萊_一」の「蓬華」は、日本の例としては、既に『経国集』に主金蘭「対策」の「蓬華沈淪、但恥_二負擔之賤_一」(卷二十)、『都氏文集』に「税_一駕於蓬華之門」(爲_二主殿頭當麻大夫_一請_二致仕_一表)、『田氏家集』に「蓬華門庭華艷非」(暮春花下奉謝諸客勸酒見賀仲平及第)があり、中国の例では、『文選』に傅長虞「贈何劭王濟」の「歸身蓬華廬、樂道以忘飢」(卷二十五)、『白氏文集』に「我本蓬華人、鄙賤劇泥沙」(答故人₁₀₈₁)などをみる。

藤原公任の⑬「蓬戸無_二人雨滴声_一」は、『莊子』『讓王篇』にみられる「原憲居魯。環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以爲樞」によるものと思われる。原憲の故事は、『淮南子』『史記』『韓詩外伝』などにも引かれ、広く知られていた。²¹⁾「蓬戸」は『礼記』にも「簾門圭竈、蓬戸甕牖」(儒行)とある。原憲の故事や『礼記』などでは、「蓬」は、戸の材料であり、東方朔「非有先生論」の「積土爲室、編蓬爲戸」(『文選』卷五十一)などもそうした例であるが、やがて、粗末な住まい、家の意味をもつ比喩的表現として用いられた。江淹「詣建平王上書」の「下官本蓬戸桑樞之人」(『文選』卷三十九)などほそうした例である。公任の⑬「蓬戸」も比喩的表現である。なお、⑬にみえる「雨滴声」も『莊子』『讓王篇』の原憲の住まいの記述にある「上漏下濕」によるものではないだろうか。原憲の故事を踏まえ、雨漏る住まいに触れる先例として橘直幹「請_レ被_下特蒙_二天恩_一兼_中任民部大輔闕_上状」の「雨湿_二原

憲之樞_一者也」(『本朝文粹』卷六)をみる。直幹のこの句は公任撰『和漢朗詠集』にも採られている。

原憲の故事に関わるものということで、慶滋保胤の⑤「無愁秋草對顔巷、不厭零蓬門憲樞」についても併せて触れておきたい。「零蓬」は原憲の住まいのありようを述べていて、『莊子』原憲の故事にある「蓬戸不完」を踏まえ、「蓬」で編んだ、傷んだ戸を原憲が厭わないことをいうものである。顔淵と原憲の二つの故事を踏まえ、対句にしていることから、先にも触れた橘直幹「請_レ被_下特蒙_二天恩_一兼_中任民部大輔闕_上状」にみる「瓢簞屢空、草滋_二顔淵之巷_一、藜藿深鎖、雨湿_二原憲之樞_一者也」(『本朝文粹』卷六)にも学んだものかと思われる。

公任の⑫「蓬居雖_レ恥_二仙郎到_一」の「蓬居」は、『文選』に、謝靈運「擬魏太子鄴中集詩 徐幹」の「華屋非蓬居、時髦豈余匹」(卷三十)、また、唐の盧綸の詩「客舍喜崔補闕司空拾遺訪宿」に「步月訪諸鄰、蓬居宿近臣」、許渾の詩「寄獻三川守劉公」に「半年三度轉蓬居、錦帳心闌羨隼旗」をみる。²²⁾粗末な貧しい住まいを意味する比喩表現である。

延昌の③「蕙帳蓬扉、欣_二々于巖谷_一」の「蓬扉」は、「蓬戸」からの連想で生じた語ではないかと思われる。戸と扉はともに住まいの出入り口であり互換性がある。「蕙帳」と対になっており、貧しい家、賤が屋の意で用いられている。「蓬扉」の例は、『文選』『芸文類聚』『玉台新詠』『白氏文集』にみえない。唐の詩に、盧照鄰「山莊休沐」の「蘭署乘閑日、蓬扉狎通棲」、李紳「聞裏謠效古歌」の「兄鋤弟耨妻在機、夜犬不吠開蓬扉」、寒山「詩三百三首」の「蓬扉不掩常幽寂、泉湧甘漿長自流」をみる。なお、『續高僧傳』や『法苑珠林』などにも例がみられ、延暦寺の僧である延昌が仏典から学んだ可能性も考えられる。

源順の②「寒夜臥_レ蓬」は、先に触れた原憲、後に述べる張仲蔚のよく知られた故事や、「蓬門」「蓬室」「蓬茨」「蓬居」「蓬廬」などの住まいに関わる慣用的比喩表現に学び、貧しく粗末な我が家の意で用いた例であろう。源順自身に①「蓬門閉」の例があるので、「蓬門」を省略したものと考えてもよいのかもしれない。

匡衡の⑧「暫慰_二蓬衡_一」及び⑩「蓬衡緣底」にみえる「蓬衡」は、これ

までみてきたような貧しく粗末な住まい、あるいは門を意味する比喩的表現からやや展開して、そのような家に住む卑賤な我が身といった、人の比喩として用いられたものと考えられる。「蓬門」「衡門」の例は多いが、「蓬衡」の例は稀少で、劉孝儀「為王儀謝國姻啟」の「臣素里庸族、蓬衡賤品」(『芸文類聚』卷四十)、日本の例としては、前稿に挙げた「不知車馬訪蓬衡」(『田氏家集』)、「生蓬茨衡」(『三教指帰』)などがある。後者二例は、貧しい、粗末な門、あるいは家の比喩であるが、劉孝儀の「蓬衡賤品」は、匡衡の当該例と同様に人のありようの比喩である。

住まいに関わる「蓬」も、みてきたように、平安初期と同様比喩的表現が多いが、藤原為時①「家舊門閑只長蓬」は、「蓬」が景物として対象化されている例として留意される。「蓬」が丈高く茂るありようによって、住まいの荒廃したさまを表現するという発想も、中国古典の先例に学んだものである。『本朝麗藻卷下』注解(八)は、杜甫「秋雨歎三首 其三」の「老父不出長蓬蒿、稚子無憂走風雨」を挙げている。杜甫の例の他にも唐の劉長卿「客舍贈別韋九建赴任河南韋十七造赴任鄭縣就便觀省」の「拙分甘棄置、窮居長蓬蒿」、呂溫「道州敬酬何處士書情見贈」の「新識幾人知杞梓、故園何歲長蓬蒿」、あるいはまた、李頎「答高三十五留別便子十一」の「寄書寂寂於陵子、蓬蒿沒身胡不仕」などの例をみる。こうした表現は、張仲蔚の故事を踏まえたものと言えるのではないだろうか。『芸文類聚』は、「蓬」の項に、『三輔決録』の「張仲蔚平陵人也。與同郡魏景卿、俱隱身不仕。所居蓬蒿沒人」を引く。清貧に生きた隱者張仲蔚の故事、「蓬蒿」生い茂る住まいは広く知られていたらしく、江淹「雜體詩 左記室詠史 思」にも「顧念張仲蔚、蓬蒿滿中園」(『文選』卷三十一)とあり、李善注が、『三輔決録』の記述を引く。仲蔚の名とその住まいの「蓬蒿」に触れた例は、唐の詩にもいくつか認められる。²⁴なお、『蒙求』にも「仲蔚蓬蒿」の標題をみる。

『芸文類聚』や『文選』李善注に引く『三輔決録』の「所居蓬蒿沒人」は、「長蓬蒿」の表現を生む発想の源となったものと思われる。為時の「長蓬」も仲蔚の故事、それを踏まえた唐詩の表現などに学んだものと言えよう。「家舊門閑只長蓬」は、門に「蓬」が生えていることを述べているというよりも、家の周り、庭、門のあたりも含めて、住まいに「蓬」が丈高く生い茂る

様をいうものであり、貧しさや荒廃の激しさを表していると考えられる。

藤原篤茂の④「性は頑魯、雖甘^レ貧於衡門之蓬、節非^レ夷齊、難^レ忍^レ饑於首陽之薇」は、「衡門」に「蓬」を取り合わせた例である。後に文脈について触れるので他の例よりもやや長く引用した。図書頭で丹波介であった篤茂が、大内記、木工頭、淡路守に任じられることを申請した奏状にみえる。住まいのありようを述べることで自らの貧しさ、窮乏を訴えている。衡門は、二本の柱の上に木を横たえて造った冠木門を指す語であるが、ここでは具体的なそうした門を指しているのではなく、粗末な門、もしくは、粗末な家の意で用いたもので、貧しさを含意する。門に限定して景物としての「蓬」を対象化したものか、あるいは、住まい、家に生える「蓬」をいったものか、二つの解釈の可能性がある。住まい、家に生える「蓬」によって、荒廃や貧しさを表す例は、先に触れた張仲蔚の例や、それを踏まえた江淹、杜甫など唐詩の例、あるいはまた『白氏文集』『微陶潛體詩 其二』の「蓬莠生庭院、泥塗失場圃」(『224』)の例、その他に散見され、日本の先例としても『新撰万葉集』に、「戸牖荒涼蓬草亂。每秋鎮待雁書遲」(卷上秋)、「蓬生荒屋前無友。郭公鳴唳還古栖」(卷下夏)がみえる。そうした多くの先例に照らして考えれば、ここでの「衡門」は、門に限定した意とより、粗末な住まい、家の意ととり、「蓬」の茂る粗末な家で貧しさに甘んじていることを述べたものと解することができそうである。『本朝文粹註釋』も「蓬深き陋居の貧しさにも甘んぜりと雖も」と解している。²⁵

一方、門に限定して景物としての「蓬」を対象化した例は、稀少である。²⁶『文選』に顔延之「和謝監靈運」の「去國還故里、幽門樹蓬藜」(卷二十六)の例がみられる。あるいは、これも門に「蓬藜」を植えることとより、住まいに植えることと解することができる例かもしれない。²⁷いずれにしても貧しい暮らしの糧として藜とともに「蓬」を植えることを述べたものではないだろうか。藜は食用となる草で、藜藿、藜羹、藜藿、藜藿、藜藿など、他の語と熟語を作り、具体的な草を指す他に、比喩的にも用いられて粗末な食物を意味する。『初學記』にも貧の類に「食藜」を要語として挙げ、「崔鴻後燕錄」を引いて「飢食藜藿、寒衣草衣」と記している。一方、李時珍『本草綱目』には、「蓬草子」を穀類の一つとして挙げ、「飛蓬」について「其飛蓬、乃藜蒿之類、

末大本小、風易拔之、故號飛蓬、子如灰藜菜子、亦可濟荒(卷二二、穀之二)とある。「飛蓬」が、飢饉の折の食料であることが記されている。以上の点を勘案すると、江淹の「幽門樹蓬藜」は、食用のために植えたものと考えることができそうである。貧しい住まいに「蓬」を植える例は、他に、陸雲の兄陸機への「答」詩に「高門降衡、修庭樹蓬」(『陸士龍集』卷三)とある。顔延之の「幽門樹蓬藜」は、あるいは、これに学んだものかもしれない。

さて、篤茂④の当該例についてであるが、自らのありようを伯夷叔斉と対比的に述べる文脈の中にあり、「雖甘^二貧於衡門之蓬^一」は「難^二忍^一、餓於首陽之薇^一」と意味的に対の関係にあると読むことができる。後者は、伯夷叔斉が首陽山に隠れ住んで薇を食とし、ついに餓死した故事に触れ、篤茂自らにはそのような行いは忍び難いと述べている。そうした文脈を考えると、当該例は、飢えをしのぐ糧として「蓬」を植えることを述べたものとするのも可能かもしれない。粗末な門、あるいは住まいに、糧として「蓬」を植えるような貧しいくらしに甘んじていると解することもできるのではないだろうか。先に触れた陸雲の「高門降衡、修庭樹蓬」は、篤茂の「衡門之蓬」と表現も近く、あるいはこれに学んだかとも思われる。『陸士龍集』は『日本国見在書目録』に名はみえないが、陸雲の当該詩は、『芸文類聚』卷二十一、『文館詞林』卷一五二に引かれている。『芸文類聚』はもとより、『文館詞林』も早く日本に伝わり、『倭名類聚鈔』序文や『日本国見在書目録』に名がみえる。⁽²⁸⁾ 直接の典拠は措くとしても、食用に「蓬」を植えることを対象化し、それによって貧しさ、家の衰微を表現するという発想が中国の古典文学にはみられ、篤茂の例がそうした発想を踏まえた可能性もあることを、ここでは指摘しておきたい。

源信の⑦「我等深厭此蓬園瓦礫之境、遙望彼蓮利瑠璃之城」は、比叡山横川を中心に活動した念仏結社である二十五三昧会のために、源信が書いた起請文の中にみえる。これまで検討してきた例は、いずれも中国古典やそれを踏まえた日本の漢詩文に学んだものであったが、「蓬園」は、管見によれば先行する例がみえない。⁽²⁹⁾ 園と熟語を作っているという点では、仲蔚の故事を踏まえた江淹の「蓬蒿滿中園」(『文選』卷三十一)などを、あるいは参考にしたものかと思われる。「瓦礫之境」と並べて用いられていること、「蓮利」

すなわち西方浄土と対になっていることなどから、荒廃し、穢れたこの世といった意味で用いたものと考えられる。住まいに関わる「蓬」の慣用的表現が、貧しさ、粗末であること、荒廃を表し、嘆き、不遇感といったものをこめて用いられることなどから発想を得たものと思われる。こうした表現が生まれるにあたっては、あるいはそれ以外にも、「蓬」が、乱れ、醜さ、狭小、僻曲、さすらい、孤独、悲しみなどさまざまなマイナスの意をこめて用いられてきたことも、なにがしか関わっているのではないだろうか。

以上、住まいに関わる「蓬」の用例について検討した。平安初期の例と同様に、おおむね中国古典文学や、それに学んだ日本の例を踏まえたものであった。貧しく粗末な住まい、あるいは門を意味する比喩的表現が多く、そのほとんどが自己卑下や謙遜の意をこめて用いられている。大江匡衡の⑧「暫慰^二蓬衡^一」、⑩「蓬衡縁底」のように住まいや門の比喩から、そのような家に住む卑賤な我が身といった、人の比喩として用いられた例もみられた。一方で、比喩的表現ではなく、住まいに生える草として対象化した例も認められた。また、源信の「蓬園」は、荒廃し、穢れたこの世といった意味で用いたもので、管見によれば他に例がなく、独自に展開させたものかと思われる注目される。

次節では、その他の例についてみてゆきたい。

五

これまで、「飛蓬」「轉蓬」に関わる例、住まいに関わる例について検討してきた。以下ではその他の例についてみてゆく。

①何因抛「蘭蕙」而不^レ荊、十歩之外採^レ蓬。(菅原文時「為^二忠義公^一」辭職第一表) 『本朝文粹』卷四)

②從^下其夢結「蘭芬」、心祈^上蓬矢、有^レ身暫退^二陋巷^一。(慶滋保胤「為^二大納言藤原卿息女女御」冊九日願文) 『本朝文粹』卷十四)

③蓬心徒轉恩猶晚、榆影半傾鬢已秋。(大江匡衡「暮秋同賦」草木搖落「應^レ教」 『江吏部集』下)

菅原文時の①「何因抛「蘭蕙」而不^レ荊、十歩之外採^レ蓬」は、文時が、藤

原兼通のために書いた辞表の中にみえる。「蓬」は、「蘭蕙」と対比されており、立派ですぐれた人の比喩である蘭や蕙に対して、凡庸で、とるにたらない者の意で用いられている。自ら、すなわち兼通を卑下したものである。立派な人にとるにたらない者をそれぞれ草に喩え、芳草とそうでない草との対比で表現する発想は、早くは『楚辞』の「離騷」にみられる。「離騷」では、蘭や蕙が、立派な人、賢人の比喩として用いられてもいて、そうした例は以後、数多く認められる。蘭や蕙と「蓬」を対比させて人の比喩として用いた例としては、『芸文類聚』の徐悱妻劉氏「祭夫文」の「幸移蓬性、頗習蘭薰」卷三十八）などがある。日本の例では、前稿で検討した、空海「遊山慕仙詩并序」の「蒿蓬聚墟壠、蘭蕙鬱山陽」〔『性靈集』卷一）をみる。「蓬」を凡庸で、とるにたらない者の意で用いるのは、前稿でも述べたように、『莊子』逍遙遊篇の「夫子猶有蓬之心也夫」の「蓬」の用い方に近い。『莊子』の例は、大きな物の使い方がわからない恵子に対する莊子の言葉であり、解釈に諸説あるが、「蓬之心」は、人としての小ささ、考えの狭小さを意味しているものと思われる。『莊子』蓬之心に依拠したと考えられる「蓬心」の例は、『文選』に顔延之「北使洛」の「蓬心既已矣、飛薄殊亦然」〔卷二十七）、謝朓「拜中軍記室辭隋王牋」の「朱邸方開、效蓬心於秋實」〔卷四十）、また、『白氏文集』に「莫學蓬心叟、胸中分是非」〔對酒閑吟、贈同老耆〕3340）などの例がみられる。

大江匡衡の③「蓬心徒轉恩猶晚」の「蓬心」は、まさに、そうした例に学んだものである。自らを謙遜して、人としての小ささ、つまらない者であることを表現している。一方、「徒轉」と続けることで、「轉蓬」を前提とした、あてどなさ、よるべく定まらないありようの意をも「蓬」にこめたものかと思われる。異なる慣用的用い方を踏まえ、意味を重ねて盛りこんだ例とみることができるよう。先に挙げた顔延之の「蓬心既已矣、飛薄殊亦然」も、「蓬心」の後に「飛薄」と続けることで、「飛蓬」を連想させ、さすらう我が身のありようを表しており、用い方に通じるところがある。

慶滋保胤の②「心祈蓬矢」は、藤原為光の娘であり、花山天皇の女御藤原低子のために書かれた願文の中にみえる。生前、男皇子の誕生を祈ったことをいう換喩的表現である。「蓬矢」は、辟邪の具であり、『礼記』内則に、「國

君世子」の誕生の折の儀礼として、「射人以桑弧蓬矢六、射天地四方」とある。日本の例として、前稿で取り上げた菅原道真の「桑弧戸上加蓬矢」〔夢二阿滿〕『菅家文章』をみる。

六

以上、平安中期、寛弘頃までの漢詩文において「蓬」がどのように用いられているか、具体的な用例を挙げつつ検討してきた。平安初期がそうであったように、おおむね中国文学の表現によく学び、自らの表現としている。中国文学に学んだ日本の先例を、明らかに参考に行っているものもあった。平安初期と同様に、「飛蓬」「轉蓬」に関わる用例と住まいに関わる用例が多く、比喩的表現がほとんどであった。住まいに生える草としての「蓬」の用例は、九世紀末になって初めてみられるが、平安中期においてもわずかながら認められた。

「飛蓬」「轉蓬」を前提として、髪 の比喩として「蓬」を用いた例については、明らかに平安前期までとは異なる用いられ方がみられた。男性の老いに関わって髪を焦点化していること、霜との取り合わせなどが挙げられる。そうした用い方は『白氏文集』に学んだものと考えられる。「飛蓬」「轉蓬」に関わる例の中には、大江以言の「蓬砂以立」操のように、慣用的比喩を踏まえた上でのさらなる比喩といった展開をみせ、喩えるものと喩えられるものとの間の隔たりが大きく、意味のとりにくい表現もみられた。「飛蓬」「轉蓬」の詩的イメージへの十分な理解が、漢詩文を作り読む人々の間で共有されていたことをうかがわせる例とも言える。住まいに関わる例では、源信の「深厭此蓬園瓦礫之境」のように、従来の「蓬」の用い方に学びつつも、独自の展開をみせていると思われる例も認められた。「蓬園」は、荒廃し、穢れたこの世といった意味であり、住まいに関わる慣用的表現から発想を得つつも、新たな意で用いた例として注目される。また、大江匡衡の「蓬心徒轉」のように、「蓬心」と「轉蓬」という二つの異なる慣用的比喩表現を踏まえ、意味を重ねて盛りこんだ例もみられた。

平安時代初期までの日本の漢詩文においては、前稿で述べたように、門と結びつけての表現が多く認められたが、すべてが比喩的表現であり、門に草

として生える「蓬」の例はみられなかった。本稿で検討した平安中期、寛弘期頃までについても、あるいは食用として門に植えたものかとも考えられる藤原篤成の「衡門之蓬」の例はあるが、同様に「蓬」を門に生える草、景物として対象化している例はみられなかった。篤成の例については、「蓬」を植えるような貧しさに甘んじている、とも解しうることであり、比喩であることには変わらない。中国古典においてそうした例が稀少であることから、少なくとも寛弘期頃までの日本の漢詩文においては、「蓬」を門に生える草として対象化するといった発想はほぼもたなかったと言ってよいのではない。但し、あくまでも、現存する用例をみるかぎりにおいてという限定つきではある。一方、同時期のかな文においては、門に生える「よもぎ」が歌に詠まれている。

かな文における「よもぎ」、漢詩文とかな文における「蓬」「よもぎ」の用いられ方の違いや、関係性などについては、稿を改めて検討することとしたい。

注

- (1) 小島雪子「平安時代文学における「よもぎ」「蓬」について(二)——平安初期までの漢詩文における「蓬」を中心に——」〔宮城教育大学紀要〕五五巻、二〇二一・一。
- (2) 前稿の末尾に、別稿(二)では、かな文における「よもぎ」の検討を行う旨を記したが、かな文の検討に先立って、日本の漢詩文における以後の展開をおさえることとした。漢詩文とかな文における「蓬」「よもぎ」の用いられ方の違いや、関係性について検討するためにも、日本の漢詩文における以後の展開を、まずおさえておきたい。
- (3) 以下に挙げる本文の引用は、『文華秀麗集』『三教指帰』『性霊集』『菅家文章』は日本古典文学大系、『経国集』は津田博幸『経国集対策註釈』、『都氏文集』は中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釋』、『田氏家集』は内田順子『田氏家集索引』、『新撰万葉集』は浅見徹・木下正俊『新撰万葉集 校本篇』、『扶桑集』は田坂順子『扶桑集 校本と索引』、延昌「延暦寺奉賀儲君始立啓」は新訂増補国史大系第29巻上『朝野群載』巻一、『尚齒会詩』は徳川黎明會叢書『私家集歌合』、源信「横川首楞嚴院二十五三昧起請」は『大日本史料』第二編之一、『平安韻字集』は天理図書館蔵、『江吏部集』は『群書類聚』第九輯、『本朝麗藻』

は川口久雄・本朝麗藻を読む会『本朝麗藻簡注』、『本朝文粹』は、新日本古典文学大系にそれぞれよった。なお、一部表記などを改めた箇所がある。

また、本稿では、早くから中国でも日本でも多くの用例がみえる、「蓬萊」及び、関連する「蓬壺」「蓬宮」「蓬山」「蓬瀛」などについては、例を挙げることはせず検討の対象とはしなかった。

用例の検索にあたっては、直接作品本文にあたる他、以下のものも参考にした。高島要『日本詩紀本文と総索引』、後藤昭雄『日本詩紀拾遺』、後藤昭雄『日本詩紀拾遺後補』(『成城文芸』二二六、二〇一四・九)、田坂順子『扶桑集 校本と索引』、大曾根章介・佐伯雅子『校本 本朝麗藻 附索引』、藤井俊博『本朝文粹漢字索引』、本間洋一『類題古詩 本文と索引』、中村璋八・伊野弘子『中右記部類紙背漢詩集』、国文学研究資料館編真福寺善本叢刊『擲金抄』、宮内庁書陵部編図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩集』、『新編国歌大観』CD-ROM版、『群書類聚』(正・続・続々)Web版、国文学研究資料館日本古典文学大系本文データベース、東京大学史料編纂所データベース、大正新脩大藏經テキストデータベース。

- (4) 植木久行「曹植吁嗟篇考——轉蓬・飛蓬の詩的心象をめぐって——」〔中国古典研究〕二〇号、一九七五・二)、同『唐詩歳時記』明治書院、一九八〇)、小島雪子、注(1)論文。
- (5) 柳澤良一・本間洋一・高島要『本朝麗藻卷下』注解(十八)〔北陸古典研究〕二六号、二〇一一・二)が、例として挙げている。

- (6) 本草書類に鉱物の一つとして名がみえるが、該当しないものと思われる。
- (7) 本稿における唐詩の本文の引用は、『全唐詩』(中華書局)によった。なお、一部表記などを改めた箇所がある。また、用例の検索には、Webサイト中国哲學書電子化計劃を用いた。

- (8) 柿村重松『本朝文粹註釋』(富山房、一九二二)は、「戦場の節を立て」と解している。
- (9) 後藤昭雄『大江以言考』(『平安期漢文学論考補訂版』勉誠出版、二〇〇五、初出は一九八二)、永井晋編『式部省補任』(八木書店、二〇〇八)を参考にした。弓削から大江への改姓について、後藤氏は長保五年十二月二十八日とされている。

- (10) 市川久編『近衛府補任』(八木書店、一九九二)を参考にした。藤原定頼は『公卿補任』(『御堂関白記』)によれば右少将とあるが、『日本紀略』には左少将とある。
- (11) 吉村茂樹『国司制度崩壊に関する研究』(東京大学出版会、一九五七)、泉谷康夫「任用国司について」〔古代文化〕二六巻五号、一九七四・五)、同「受領

国司と任用国司」〔日本中世社会成立史の研究〕高科書店、一九九二、初出は一九七四）、木内基容子「遥授国司制の成立について——「公卿国司」を中心として——」〔日本古代・中世史 研究と資料〕三号、一九八八）

- (12) なお、残りの四人についても、左遷や遠方地域への赴任が確認できるのは、源政政のみである。源政は『小右記』寛弘二年（一〇〇五）正月二十日に受領功課の記述があり、受領国司であったことが確認できる。しかし、先に述べたように、漢詩文が現存せず、作者であったことがわかる記録もみられない。

- (13) 笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』（東京大学出版会、一九八五）。

- (14) なお、前稿では、「登徒子好色賦」の「蓬頭」及び、それを踏まえた『三教指帰』の例については、「飛蓬」「轉蓬」を前提とした表現とみることもできるが、一方で、「蓬」には、物の盛んな様子の意で用いられる例もあることを勘案すると、「蓬」が草として繁茂するありようからの表現と考える可能性もあることを、『山海経』の用例も引きながら述べた。小島雪子、注（一）論文。

- (15) 源信の③「蓬髪」は、はさばさの乱れた女性の髪と解することもできる。本稿における『白氏文集』の本文の引用は、四部叢刊本によった。なお、一部表記などを改めた箇所がある。また、作品番号は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九六〇）の番号を付した。

- (16) 用例の検索には、平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（同朋舎出版、一九八九）を用いた。髪でも鬢でもないが、頭部に関わる例として、他に「肘痺宜生柳、頭旋劇轉蓬」（初病風 328）がみえる。病による頭の痛み、不調を「轉蓬」になぞらえた、他に類例をみない表現である。

- (17) 『本朝文粹註釋』は、「鬢髮蓬の如く」と解している。柿村重松、注（8）。⑦「雙鬢漸梳商老蓬」が商山のお話を踏まえていることは、柳澤良一・本間洋一・高島要『本朝麗藻卷下』注解（三）〔北陸古典研究〕一一号、一九九六・一〇）に指摘がある。

- (18) これらの先行例については、既に前稿で触れており、重複を避けてここでは省略した。詳細はそちらを参照いただければ幸いである。なお、本稿では、他の語の先行例に関しても、前稿で触れたものについては、特に作品名など省略したものがある。同様に前稿を参照されたい。

- (19) 柳澤良一・本間洋一・高島要『本朝麗藻卷下』注解（十三）〔北陸古典研究〕二二号、二〇〇六・一〇）は、「蓬戸」の例として、『莊子』を引く『初学記』を挙げている。なお、『蒙求』にも「原憲桑樞」の標題をみる。

- (20) 柳澤良一・本間洋一・高島要『本朝麗藻卷下』注解（八）〔北陸古典研究〕一六号、二〇〇一・一〇）が、謝靈運の例を挙げている。

- (21) 柳澤良一・本間洋一・高島要『本朝麗藻卷下』注解（八）〔北陸古典研究〕一六号、二〇〇一・一〇）が、謝靈運の例を挙げている。

- (22) 柳澤良一・本間洋一・高島要、注（22）論文。

- (23) 李白、李德裕、李鹹用、羅隱、呉筠などに例がみられる。

- (24) 柿村重松、注（8）。

- (25) 平安初期の日本の例においても、「蓬門」「蓬華門」「蓬茨衡」「蓬衡」「蓬艾門」など「蓬」を門と結びつけた表現が多く認められるものの、前稿で述べたように、それらはすべて比喩的表現である。小島雪子、注（一）論文。

- (26) 川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹訳注『文選 詩篇（四）』（岩波書店、二〇一八）では、「ひっそりと門を閉ざして蓬や藜を植えよう」と解す。

- (27) 『文館詞林』については、木村正辭『文館詞林盛事』（慶応二、『影弘本 文館詞林』古典研究会、一九六九に影印が所収されている）、前野直彬「文館詞林について」〔中国語学〕一三三号、一九四九・一）、宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題 漢籍篇（一九六〇）』等を参照されたい。

- (28) 仏典などに学んだ可能性も考えられようが、管見によれば、類似した用い方をした「蓬園」の例を見つけることはできなかった。

- (29) 『文選』『玉台新詠』芸文類聚『白氏文集』をみても、門に植えたものと解することもできる願延之の「幽門樹蓬藜」の例があるのみである。前稿で既に触れたように「蓬門」「蓬蒿門」などの例はみられるものの、それらはすべて、貧しく粗末な住まい、もしくは門を意味する比喩的表現と考えられる。なお、特に白居易の「茸茅爲我廬、編蓬爲我門」（詠拙 0256）などは、「蓬門」が「蓬」の生える門を意味するのではなく、「蓬」を材料として作った門の意から派生した比喩的表現であることを理解する助けとなる例と言えよう。

- (30) 唐詩には、門に生える「蓬」の例としては、管見によれば陸龜蒙「有示」の「相對莫辭貧、蓬蒿任塞門」のみ認められる。なお、他に「戦国策」の「王一日山稜崩、子侯立、士倉用事、王后之門、必生蓬蒿」（孝文王）などの例がある。『戦国策』の例は、「王后之門」の「蓬蒿」であり、かつての栄華、隆盛に対し、衰微、凋落を表すものである。

〔付記〕 本稿をなすにあたって宮城教育大学名誉教授島森哲男先生より、さまざまなご教示を賜った。厚く御礼申し上げます。

（令和三年九月三〇日受理）

‘Yomogi’ and ‘Hou’ in Heian Literature (Part2):

Forcalizing ‘Hou’ in Middle Heian Period *Kansibun* Discourse

KOJIMA Yukiko

Abstract

Although there are no examples earlier, *yomogi* appears in Heian *kana* discourse from the early tenth century onward. One reason is that earlier on practitioners had come into contact with *hou* in Classical Chinese literature and used it in *kanshibun* in Japan as well. In the previous Part 1 of this article, the use of *hou* in *kanshibun* in Japan until the early Heian period was examined in order to see what was studied and to map its development from Chinese literature to Japanese *kanshibun* to Japanese *kana* discourse. In this article the ways in which *hou* was utilized in *kanshibun* in the later Zyōhei, Tenryaku, and Kankō mid-Heian periods and its relationship with Classical Chinese literature from the early Heian period onward will be examined.

Key words : hou (蓬), yomogi (よもぎ), kansibun (漢詩文) discourse, middle Heian period, Chinese literature